

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

無料

第79号

毎月発行

発行 2018年(平成30年)12月16日 日曜日

2018年(平成30年)12月16日 日曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、65歳、経営
コンサルタント、趣味は縄
文研究、今年1月に『東北先
史時代学』を提唱、東北から
日本を変えることを標榜。また縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。映像プロデュース事業にも進出。



古代東北の英雄・アテルイの地探訪

現地で分かる決断力と統率力と勇猛果敢 連載企画 ⑫ 【東北先史時代学】

アテルイは今でも水
沢の英雄

先月末、東北古代史にと
って大きな分岐点となった、
「三十八年戦争」の頂点と
もいえる「**栗伏(すふし)**
の戦い」の舞台となった岩
手県奥州市水沢地区、なか
でも「栗伏」、現在の四丑(し
うし)の地を訪ね、アテル
イの足跡を辿ることは以前
からの課題であったが、よ
うやくその機会が訪れ、訪
問した。

古代東北の英雄であるア
テルイの名前は必ずしも全
国的に有名とはいえない。
しかし、さすがにアテル
イ生誕の地、水沢地区では
状況は大きく異なる。
同地区には、あちこちに
アテルイ由縁の碑や往時を
しのぼせる絵、モニユメン
トが立ち、解説の看板等が
立っていた。
また奥州市埋蔵文化財調
査センターには、アテルイ
に関するさまざまな資料や
映像、また等身大のアテル
イの想像復元像などがあり、

ここがアテルイの生誕の地
であり、東北の運命を決め
た大きな戦いの地であり、
また英雄としてのアテルイ
の足跡を後代まで伝えよう
という姿勢が強く伝わって
きた。

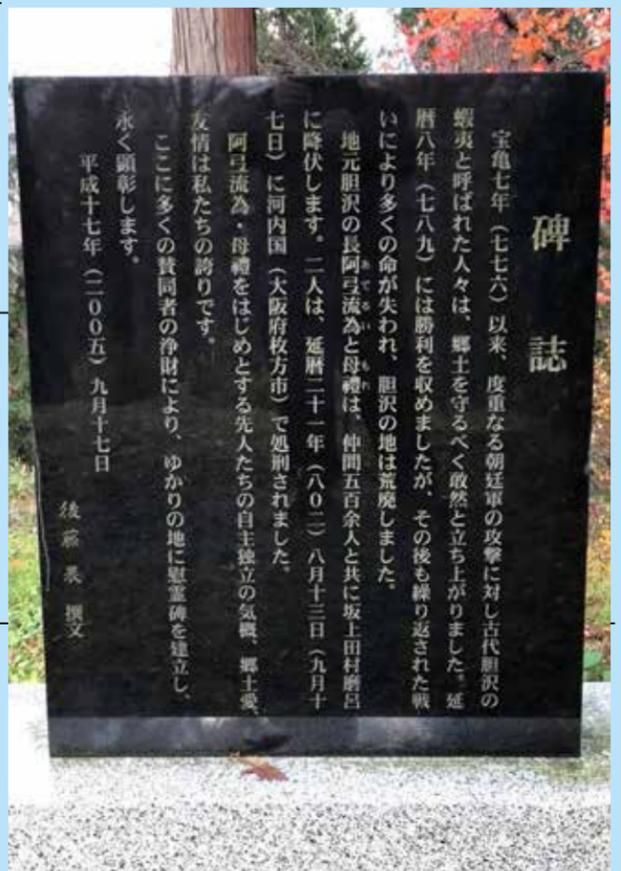
栗伏の戦い

当時、国内唯一の未支配
地となった東北の支配を目
論む朝廷が、兵站部隊も含
んだ五万ともいわれる大
軍を、アテルイらエミシの
拠点である水沢地区をはじ



アテルイイメージ肖像

「アテルイのイメージ肖像」
2000年3月21日、東北地方振興局(現・東北広
域振興局)は、延暦八年の会(佐藤義経)に委託
して制作を進めていた「アテルイの肖像」を発表し
ました。同振興局は、岩手地方の広域生活圏を「ア
テルイの会」と位置付け、伝説の人物である義経王
[茨城県鹿嶋市宮原]をシンボルマークの原型とし
てきました。しかし、アテルイの名前が知られて
いく中で義経王の顔が、歴史上実在したアテルイと
類似されることが多いことから、アテルイ没後千二
百年を前に見直しを検討してきました。
肖像制作にあたっては、岩手地方を中心に、10代
から19代までの各年代(男女同数)を対象とした千
人アンケートを実施。更に公開シンポジウムにおい
て、さまざまな分野の専門家から意見を聞くなど、
制作の方向が定められました。
具体的には、岩手地方に伝わる伝説の伝説である奥
州市水沢区黒石町の義経御実像(貞観4年・西暦
862年)の複製と、義経王の肖像をベースに、
岩手大学工学部の平藤和彦教授の技術指導でコンピ
ューター・グラフィックで合成。調整された部分等
を修正し、時代考証を加えて制作されました。



出羽神社近くの碑誌

「栗伏の戦い」とはそう
したものであった。
しかし、この圧倒的な兵
力の差にもかかわらず、朝
廷が惨敗するという結末を
迎えたのだ。

この戦いは日本古代史で
はあまり有名ではないが、
圧倒的優勢の朝廷が敗れる
という常識では考えられな
い不名誉を喧伝したくない
意図があったためであろう
と推察できる。
しかし、この戦いは、東
北の歴史のみならず、日本
の歴史においても非常に重
要な戦いであったのだ。

戦いの現場を歩く

朝廷軍は、紀古佐美(き
のこさみ)を大將軍として、
陸奥国の多賀城を出て、岩
手に入り、北上川沿いを北
上する。
兵站部隊を除く一万の兵
士を、先鋒隊六千、中軍・
後軍四千に分けた。そして
先に北上川東岸に渡った中

軍・後軍四千に、アテルイ
軍はわずかに三百で挑んだ。
ゲリラ戦による奇襲攻撃
である。
しかし、アテルイ軍の作
戦としては、この中軍・後
軍四千をおびき出して、ア
テルイ軍本軍による総攻撃
をするというものだった。
朝廷軍の先鋒隊六千も北
上川を東に渡ろうとしたが、
アテルイ軍はそれを阻止し
たうえ、中軍・後軍四千に
伏兵八百と背後からの四百
の兵で攻め立て、北上川の
東岸に追い詰め、包囲し、
さらにはアテルイ軍の勢い
に負け、北上川の流れにな
だれ込ませたのだ。

結果、中軍・後軍四千は、
戦死者二十五名、矢にあた
るもの二百四十五名、北上
川で溺死するもの千三十六
名、裸身で泳ぎ来るもの
千二百五十七名という大惨
敗となった。

激戦となった北上川東岸
四丑橋を渡ったところに

「栗伏古戦場」碑がある。
また、戦いの趨勢を見て、
戦略を決断し、そこから中
軍・後軍四千に攻め込んで
いった、羽黒山の出羽神社
の高台からかつての激戦地

を眺めてみた。
そこではアテルイ軍の勇
猛果敢な姿と馬のいななき、
兵士の声などが蘇ってくる
ようであった。



モレ屋敷跡

圧倒的な朝廷軍となぜ戦ったのか

こうしてアテルイ軍の大勝利に終わった巢伏の戦いではあったが、以前から、単純ではあるが大きな疑問を抱いていた。

なぜアテルイやモレ、その仲間たちが、五万という朝廷軍を迎え撃つ決断をしたのかということである。

最初から戦わず、降伏する、あるいは和睦を申し込むという選択肢も当然あったはずである。

また、こうした戦いが発生する以前は、エミシンの集落は、せいぜい百名程度の集落が適度な間隔を置いて存在していて、大集団など存在しなかったはずだった。



巢伏の戦いの想像図

仮にいくつかの集落が団結したとしても、せいぜい三百とか四百とかの規模にしかならず、しかもすべてが壮年男子というわけではない。朝廷軍の軍隊の規模とは比べられない集落規模である。

同時に、朝廷軍は、兵糧部隊を含めるとはいえ、五万の規模であり、いかにゲリラ戦で戦うとはいえ、勝敗は戦う前から決まっております、そもそも戦う決断そのものが無謀すぎると思うのだ。

なのに、現在の岩手県奥州市水沢、かつての「巢伏」で戦ったのである。いったい何がそうした決断をさせたのかいまでも分からないし、理解できない。

そこまでの決断をさせたものは何だったのだろうか。現地の取材を終えた今も答えは見いだせない。

一方、朝廷軍はなぜ数万の軍隊を派遣したのか

同時に、朝廷軍は、ただか数百人規模のエミシ勢力征伐のためになぜ五万の軍隊を送ったのだろうか。

当時の朝廷の財政もかなりきびしいなかで、これだけの軍隊を送る理由はどこにあったのだろうか。

理由のひとつと思われるのは、それ以前のエミシ反乱の痛い反省を踏まえて、それくらい規模でないと征伐できないと判断したこともあるだろう。



現在の巢伏合戦場

しかし、その予想は「巢伏の戦い」で現実として証明されることとなり、朝廷の見込みはある意味で当たったのではある。



巢伏の戦いの碑

その後の戦い

しかし、朝廷は引き下がらなかつた。

七百九十四年には、大伴麻呂(おおもものおとまる)が征夷大使となり、副将軍として坂上田村麻呂(さかのうえのたむらまろ)を配して攻め入った。そして田村麻呂は功績をあげるにいたる。

その後は、田村麻呂によるさまざまなエミシ懐柔策が実施された。

そしてついに、八百一年、田村麻呂は征夷大將軍となり、四万ともいわれる大軍を率いて大規模なエミシ征伐を行った。

ついにアテルイ降伏

八百二年、度重なる朝廷の大軍による侵攻と懐柔策により、さすがのアテルイ軍も耐えきれずに、ついにエミシ兵士五百とともに降伏するにいたる。

田村麻呂は、降伏したアテルイ・モレらの助命を嘆願するも、受け入れられず、ついに処刑されるにいたる。やはりゲリラ戦は長期戦には向かないのだろう。打つ手は限られてくる。手の内を読まれる。

東北略奪の開始

アテルイらの処刑後、東北では散発的な反乱があったが、徐々に沈静化していった。そして東北はほとんど略奪されていったのだ。

そうした流れに激変する直前の華々しいエミシの活躍が「巢伏の戦い」であったのだ。



アテルイ生誕の地



胆沢城跡



鎮守府八幡宮



巨大はまぐり



やはり日本酒も出た



飲み放題ワインずらり

ワイン飲み放題と盛り沢山の三陸海鮮で大盛況
第1回三陸酒海鮮会 ANNEXE(12/2)赤坂見附で開催
年明けは通常の三陸酒海鮮会(第37回)に戻ります 1/26



ナゲットとしめ鯖



肉もある



巨大な牡蠣



第52回
水産業再興のための
料理レシピ紹介
《サーモンとブロッコリー、ネギの
軽い煮込みチーズ風味》

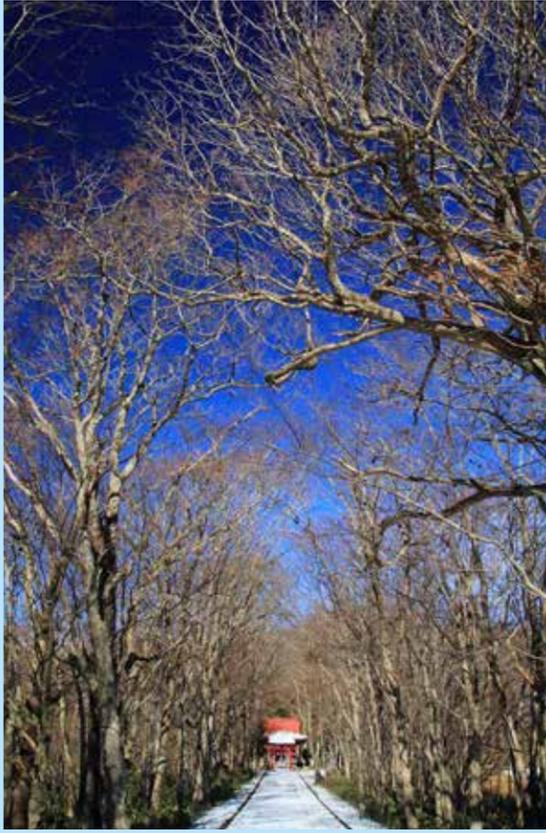
シャンペンやワイン
に合います。クリスマスディナーに。
(松本談)



郷土料理愛好家
松本由美子氏

【材料】 2人分、サーモン 150 g、ブロッコリー 1/2(110 g)、ネギ 100 g、
にんにく 薄切り 1/2 かけ、塩 小 1/2、水 1 カップ、白ワイン大 1、
カマンベール 1/2 個 (50 g)

【作り方】 ① ブロッコリーは房と茎を切り分け、房は 5mm厚さの薄切り、茎は皮を剥いて 1cm角に切る。ネギの白い部分を 2cm長さに切る。チーズは 8等分のくし形に切る。② 鍋にブロッコリー、茎、ネギ、にんにくを入れ、塩の半量をふる。サーモンを並べ、白ワインをふる。③ サーモンに残りの塩を振り、水を 1 カップを縁から加えて蓋をし、中火にかける。煮立ったら、弱火にし、8分～10分煮て蓋をとり、ブロッコリーの房を散らす。④ 器に盛り、チーズをのせて煮汁を回しかける。



写真でお伝えする **東北の風景(初冬の山)**

写真撮影 尾崎匠



消えた道州制論議

道州制を巡るこれまでの動き

首相の諮問機関である第28次地方制度調査会が「道州制のあり方に関する答申」を公表したのは2009年2月のことであった。いわゆる「平成の大合併」で市町村合併が進展したことを踏まえ、また都道府県を越える広域行政課題が増加しているとの認識の下、地方分権改革の確かな担い手として道州を据えた。単に都道府県制度の改革に留まらず、「国のかたち」の見直しにかかわる改革と位置づけ、「国と地方双方の政府を再構築し、新しい政府像の確立を目指す」と謳った。基本的な制度設計としては、現在都道府県が実施している事務を大幅に市町村に移譲すると共に、国とりわけ地方支分部局が実施している事務をできる限り道州に移譲し、同時に適切な税源移譲を実施するもの

としていた。その上で、「道州制の導入が適当」と結論していた。

同じ年の9月には第一次安倍内閣で道州制担当大臣が配置され、3年以内に「道州制ビジョン」を策定するという方針が示され、翌2007年1月に政府の「道州制ビジョン懇談会」が設置された。4月には道州制特区推進法が施行されて、北海道に対して8つの事務が漸次移譲されることになった。同年6月には自民党の道州制調査会が「道州制に関する第2次中間報告」を公表し、その中で「導入時期は、今後8〜10年を目標」とすると明記した。翌2008年3月には「道州制ビジョン懇談会」が中間報告を公表し、「2018年までに道州制に完全移行」するとした。

年3月には経団連も「道州制の導入に向けた第2次提言」の「中間とりまとめ」を公表、7月には自民党の道州制推進本部が「道州制に関する第3次中間報告」を公表、11月には経団連が第2次提言の最終案を公表するなど、各方面の動きが活発だった。一連の動きから、確かに近い将来道州制が実現するのではないかと感じられたのも事実である。潮目が変わったのは2009年の政権交代と2011年に発生した東日本大震災だったように思える。まず政権交代で政権を握った民主党は道州制導入には反対で、「道州制ビジョン懇談会」も解散された。新たに置かれた「地域主権戦略会議」では、「地域のことは地域に住む住民が決める」という趣旨から、都道府県ではなく市町村の権限強化が主たるテーマとなった。2011年に発生した東日本大震災の後には、道州制を導入すると巨大地震など日本全体で対応しなければならぬような大規模災害への対応能力が低下するのではないかといった懸念も出されるようになった。

2次安倍内閣の肝いりでつくられた地方分権改革推進本部も、設置された2013年には4回開催されたが、2016年、2017年は1回ずつの開催に留まっている。今年はまだ「道州制ビジョン懇談会」が中間報告で「道州制に完全移行」と明記した2018年であるが、道州制に完全移行どころか、道州制に関するアクションがほとんど見られない年となっている。2012年に「道州制基本法案」の骨子案まで公表した自民党の道州制推進本部も、今年10月ひっそりと廃止された。

道州制に対する批判

進まない理由は結局のところ、道州制に対する慎重なあるいは批判的な見方が根強いこと、そしてまた先の第28次地方制度調査会の答申に盛り込まれたように、道州制移行には不可欠と見られた事務や税源の移譲が進まないことの2点に集約されるように思われる。福井県知事の西川一誠氏は、2008年に「幻想としての道州制」を中央公論に寄稿している。タイトルで分かる通り、氏は道州制反対論者であるが、そこで指摘されていることは、今後道州制を考える上で重要なポイントがいくつも含まれているように見える。

氏は、道州制論について、「全体としては理想主義の色彩を帯びていながらも、観念的な期待感に満ちあふれているだけの議論に終始している」として、その例として「経済の活性化については、道州制により区域が自立し、道州間の競争も生まれて、経済活動が盛んになるといった、前提条件を無視した『抽象論』。また、官僚制の弊害の除去については、中央官庁の権限を道州に大幅に委譲できるという極めて単純な『期待論』。地方分権について言うと、導入を機に道州の条例制定権や課税自主権が抜本的に見直されるべき」という『べき論』に留まっている」と批判している。確かに、道州制を導入するだけで同時に国からの権限移譲も進むという見方はあまりに楽観的に過ぎる。見かけは道州制しかしその実質なる都道府県合併に過ぎないという形になる可能性も大いにある。そのような道州制では確かに意味はない。

氏はまた、北海道と九州を比較する。北海道は道州の規模を持つが、北海道全体に占める札幌市の人口比は2005年で約33%、これに対して九州に占める福岡市の人口比は約10%である。これを挙げ、「地域が県に分かれ、七つの県がある九州では福岡市への集中は緩やかである。一方、広大な地域に県都が一つの北海道において札幌市への集中が著しい」と指摘し、「道州制は結局、道州の中にミニ東京と周辺過疎を作り出すことになる。それはブロッコ内の新たな集権化である」と主張している。これもまさにその通りである。東北が一つの州になるとしても州都を仙台にしていけない、というのが私の持論だが、それはまさにこう論だが、それはまさにこう論である。ただでさえ人口が多い仙台が州都になると、まさに札幌のように、一極集中を招くことになるに違いない。

まずは連携の実績を積み重ねる

権限移譲のない道州制にはさほど意味はないとすれば、その権限を手放そうとしない中央官庁を前にして道州制を前に進めていくのはかなりの困難を伴うことである。ただでさえ人口が多い仙台が州都になると、まさに札幌のように、一極集中を招くことになるに違いない。氏はまた、何百キロメートルも離れた各地の教育や福祉を、日頃の行政や選挙などを通じて、わがこととして理解するには大きな困難が伴う。このような組織を持った道州は、住民にとっても身近な自治体というよりほとんど国と同様な政体となる。つまり、住民にとって道州は都道府県よりも遠い存在になると指摘しているわけである。こうした懸念があるからこそ、道州制は単なる都道府県合併であってはならないわけである。すなわち、これまで都道府県が担っていた業務を道州が担うのではなく、国が担っていた業務を道州が担い、都道府県が担っていた業務を市町村が担うというようにしていかなくてはならない。そうした場合、道州制が実現できれば、国より近い道州、都道府県より近い市町村ができる。

まさかこの部分が道州制の肝であるように思う。ものでないことは、これまでの経緯からも明らかである。ひと頃、道州制導入の旗振り役の一部であった経団連は、今年「広域連携」の推進を目指す方向に舵を切った。道州制導入が一足飛びに進まないことを見越してのことである。一見後退に見えるかもしれないが、このアプローチはありだと思える。まず連携できることから連携して、実績を積み上げることでその先の議論を喚起するということが可能である。東北も、六県と一緒に取り組む機会を増やしていくこと、その中で自治体職員だけでなく、住民同士の交流も活発にしていくことをまずは目指していかなくてはならない。今後もしんがり進むようには到底見えない。

そしてまた問題だと感じるのは、道州制を含む地方分権に関する地方からの発信が、このところ少なすぎである。地方が声を上げないものを中央があげて取り上げることはないに違いない。かつてのように地方からもっと声を上げていかなければならない。それは、自治体にだけ任せていけばよいのではなく、地方に住む我々一人ひとりが事あるごとに、あらゆる機会を捉えて声を上げていくことが求められる。

とは言え、声を上げたからといって簡単に実現するものではない。被災発生時にはできない。平時から、緊急事態発生時にも機能する連携体制を構築しておくべきである。

道州制に関する動きが活発だった頃の、かなり以前の調査だが、財団法人経済広報センターによる「道州制に関する意識調査報告書」(2008年7月)でも、「道州制の議論を進めること」について「賛成」と答えた人の割合は、東北では43%と、九州・沖縄地方と並んで全国で最も高く、北海道が42%でそれに次いでいた。日本世論調査会の2009年12月の全国世論調査でも、道州制に「賛成」あるいは「どちらかといえば賛成」と答えた人の割合は北海道、東北、四国で多かった。東北を始め、北海道、四国、九州に共通しているのは、地域的に一体感があるということである。ここで特筆したいのは、北海道、四国、九州が海で他の地域と仕切られた地域であるのに対し、東北は本州の一部で他地域と陸続きであるにも関わらず一体感があるということである。東北の一体感というのは地理的につくられた一体感というよりは、文化的にあるいは心情的に醸成された一体感であると言えるのではないだろうか。これは東北にとっての何よりの宝であろうと思う。その宝を大事に活用していきたい。

執筆者紹介

大友浩平

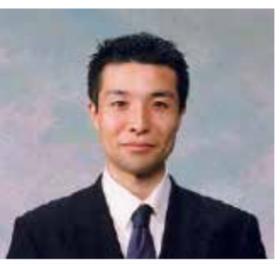
(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagna51/

Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo



『エミシはいなかった』説が 東北にもたらすもの事

今年、久々の「エミシ」関連書籍が店頭に登場した。題して、『つくられたエミシ』。著者は北海道生まれで現在東海大学歴史学教授の松本建速氏である。

松本建速という人と、『蝦夷の考古学』『蝦夷とは誰か』(全て同成社)などの著作で既にその分野の書棚では馴染みの書き手であり、専門が蝦夷であるというほどにその方面の研究には並々ならぬ情熱を持っている様子であるが、これまでは自説を前面に押し出さなかった印象はあまりなかった。

ところが、本書はタイトルからしてかなり主張が強く、思い切った自論の展開



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始めると東北好きである。

がなされておられ、いささか面食らうほどである。

本書の主旨はズバリ、「エミシは古代大和國家による完全な創作であり、正史として残る関連文書は全て作文である」。

氏によれば、坂上田村麻呂による「蝦夷征伐」、つまりアザマロからアテルイに至るまでの所謂「三十八年戦争」など全てはフィクションだというのだ。以下その主張の要点を箇条書きで挙げてみる。

- * 一、古代東国・東北住民を「蝦夷」と表記した史書は『日本書紀』のみであり、同時代の『古事記』や各地の『風土記』は全て別表記で、『日本書紀』に比べて極端に記述が少ない。
- 二、蝦夷には通訳が必要だったという記述、六五九年唐に朝貢し献上したという「熟蝦夷」は中央に最も近い地域の住民だったにもかかわらず髪が長いなどの異容で皇帝の興味を引いたという記述は蝦夷がアイヌであった事を示しているが、既に当時の東北には移住者が浸透しており、七世紀以降の東北にアイヌ語を話す住民はいなかったはずだ。
- 三、最も遠い地方の蝦夷である「都加留(つがる)」は現在の青森県の事ではな

く、アイヌ語でアザラシを差すトツカルの住むオホーツク海沿岸の事である。即ち「熟蝦夷」「荒蝦夷」「都加留」は全て現在の北海道のアイヌの事であった。

四、「蔵手刀」は蝦夷の武器であったという説があるが、実用の武器としては刀身が短すぎ実戦では不利である上に、当時の北東北には小規模な鍛冶は存在して、蔵手刀を鍛冶できる技術などはなかった。北日本に出土する蔵手刀は、全て交易によって西南地方より入手したものである。

五、エミシは馬の民と伝わるがアイヌは馬を飼わない。(他、数点あるが文字数の関係で省略する)

* それでは一体なぜ、古代日本政府はエミシという存在を捏造したのか?それは、『日本書紀』の書かれた時代の大和政権が置かれていた、大陸との国交が背景としてあったという。中国と対等に交渉し渡り合うには、大和と同等の水準にある国家である事を示す必要があった。日本がかつての「倭国」ではもはやなく、夷族が朝貢してくる強大な一国家であるという事。

どうして歴史上では到達していないはずの青森県でも英雄として「ねぶた」の伝承でも語られていたか。それはもしかすると田村麻呂が本場に青森まで来ていて、彼が相手にした蝦夷とは、北海道のアイヌだったのかも知れないとか・・・

しかし、やはり疑問を拭う事ができないのである。

二、を読むとわかるが、氏はいくまでか、蝦夷はアイヌであり、五世紀以降の東北にはアイヌはいなかったと断じて即ち蝦夷もいなかったと結論づけている。しかし、同じ日本語でも場合によっては現代でも津軽弁や薩摩弁に通訳が必要である事から、蝦夷がアイヌ語を話していたとは断言できないし、必ずしも蝦夷=アイヌではない、という認識は既に常識になってきている。むしろ、唐の天子に献上した蝦夷は異民族を強調するために取ってアイヌ的容貌の者を選んだと疑うべきではないか。

三、ツガルを北海道のオホーツク沿岸に当てはめるに至っては、さすがに強引な印象が拭えない。では青森の津軽の地名はどこからついたのか。

四、五、の蔵手刀は起源は関東・中部であるが東北に伝わって反りのある独自の形状に進化したと言われる。

北東北に鍛冶はなくとも南東北には大規模な鍛冶の証拠がある。交易の品に過ぎないとするには出土数が膨大であり、特に戦闘用に

長く発達し、鍛冶にも実用向きに合理的処理が為されているものがある。

加えて、よく知られているアテルイ、モレ(モライ、モタイとも)はもちろん、更に古い時代のアヤカス、イナリムシ、ウクハウなど奥羽人のアイヌ語系人名をどう考えればいいのか。これらも全て創作だということか?いや、彼らは北海道のアイヌである、というなら新たに郡を開拓したいと願った「越の蝦夷」イコキナの出身地はどこだったのか?

更に、平泉を建設した藤原清衡は自らを「東夷の遠首」「俘囚の上頭」と呼んだ事が、中尊寺落慶願文に明らかである。

確かに、彼らも自らを蝦夷とは称していないが、意味は同じである。古代に捏造された概念を刷り込まれたのがアイデンティティとしたのか?そうではないだろう。列島の東方とその北は「夷」の地と古代から確かに位置づけられ、実際に戦いが繰り返されたからこそ平泉が生まれたのだ。

「正史」には確かに捏造があり、誤りが多いかも知れないが、全否定するには東北の歴史はあまりにも謎が多く、深淵に過ぎるような気がしてならないのである。

本書を読んでいて、思い起こされるのが、ユーラシア西の果てのケルト民族で

ある。ケルトもまた、近代になって創作された概念と断じられたり、実体がない、民族ですらない、と言われたりしている。ケルトとエミシに共通するのは、ともに文献を残さなかった、敗者の側であるという事だ。

よく言えば彼らの実態について想像を働かせる余地がある。しかし、逆に形成されたイメージに対し「捏造」「虚像」という判定が下され、闇に葬られる可能性も高いという事だろう。

松本建速氏は本書を執筆するに当たり、当初これまでの著作をベースに解りやすい本にまとめる予定だったが、ある理由で大きな変更を行ったという。

おそらくは藤原不比等の権力を背後に『日本書紀』にて宣伝された「蝦夷」という存在が現代の私たちに知られている背景には、近代国家への道を歩み始めた明治政府が富国強兵を推し進め、海外への領土拡張の機運を高めるために古代天皇国家が成し遂げた「夷狄征伐」を教科書でも大々的に謳い上げ、国民の意識に刷り込ませた過去があった。つまり、「エミシ」は再び、国家に利用された訳だ。

そこに来て近年の安倍政権による右傾化と、「戦争ができる国家」への強引な舵取り。松本氏にとって、歴史が捏造され、国民の意識操作に利用されてきたその事実を伝え広める事は、

歴史家としての今こそ果さねばならない使命ともいえるべきものがある。

しかし、正直な印象として氏は思い余って極端に走り過ぎたのではないかと、と思わざるを得ないところがある。あくまでも政治と史実は別物であり、時の政治にいくら危機感を覚えるからといって、これまでの自説にセンセーショナルな色合いを持たせるために脚色する事が正しい事なのか。

加えて、時の政府による情報操作の意図が絡んでいる事柄は全て嘘で、作り話である、という風潮を作り出す事に加担してはいないか。

その例が、源義経の北行伝説である。大陸に渡った義経がジンギスカンになった伝説や、北海道に渡ってアイヌに生活技術を伝えた話が、日本の領土拡大を意図した伝説の捏造と政治利用であるとする事で、義経の北行そのものが架空と片付けられ、真実追究の可能性が摘み取られてしまう。同様に、エミシが政治的に利用された事実があるからといって、その存在を真つ向から否定してしまう事



東北のアイデンティティに一石を投じるか?『つくられたエミシ』

で、古来日本列島内に展開してきた民族の多様性を考察する契機すら潰し兼ねない。それは逆に日本人の意識を画一化してしまう危険を孕んではいないだろうか。だが、果たして「エミシ」は本当に作り話なのか。

『日本書紀』と同時代に編纂された各地の国司による報告書即ち『風土記』のうち、『陸奥国風土記』の残された一部に、現在の福島県南西部の住民「土蜘蛛」がヤマトタケルの東征に対して津軽の「夷」に援軍を得て、彼らは共闘してこれに立ち向かったとある。

現在の福島県白河郡八槻と思われる地域から遠く津軽に救援を求めるといふ記録に、全くの架空では語り得ないリアリティを感じる。

この距離を、彼ら奥羽南北両端の民はいかにして交信したか。中路正恒氏は、そこに山頂を伝うように設けられた狼煙という伝達施設の存在を仮定する。映画『ロード・オブ・オプ・ザ・リング』にも描かれた、狼煙による遠方からの受信、そして遠方への送信の連鎖である。蝦夷のイメージを既に

ここで覆すような、東北を舞台とした壮大なドラマだ。

結局「蝦夷」という表記自体は『日本書紀』独自の表現だったとしても、それに相当する人々は確かに存在した、と判断する他ない。

仮に、古代の蝦夷に関する記述が全てフィクションだったとして、それが現代を生きる東北人に如何ほど影響するだろうか。仮想の敵を必要とした国家によっていずれにしても東北は攻め続けられる宿命を負い、奥州安倍氏は確かに滅ぼされ、後の平泉もまた征服された。その後の長い苦難の道も、培ってきた底力も誇りも捏造の入り込む隙はなく、微塵も揺らぐものではない。東北人にとって、エミシとはここ東北での生き方そのものであり、先人の生き様を知る事、これからの東北で生きる意味を考える事で、更なるエミシの歴史が重ねられていくだろう。

「エミシなどいなかった」と言う人に、答えるがいい。「いま、俺たちがいる」と。



ツルウメモドキ



降雪



ナツメ

シリーズ 遠野の自然
「遠野の大雪」
遠野 1000 景より

暦では「大雪」を迎えた。ついに、その文字を見ただけで身震いする季節がやってきた。
つい先ごろまでは暖かかったり肌寒かったりを繰り返して不安定だった天候は、まっしぐらに寒さに突き進んできた。
遠野ではすでに氷点下二桁の日もあるようだ。十二月に入っただばかりでこの気温ということは、真冬を迎えたらどうなるのだろうか。余計な心配をしよう。
今回は、初冬の遠野の風景写真である。
降雪、霜、白鳥、どれも冬そのものの風景である。それでも木の実や早朝の灯りに鮮やかな色彩が見えてほっとする季節でもある。



初雪と藁



白鳥飛ぶ



早朝の遠野盆地



霜降る町



早朝の白鳥

